広島市スポーツ振興審議会第３回スポーツ振興計画検討部会　会議録

Ⅰ　開催日時

平成２１年９月８日（火）　午後３時～午後６時

Ⅱ　開催場所

広島市中区地域福祉センター５階大会議室

Ⅲ　出席者

１　委員１１名中８名出席

東川部会長、小野副部会長、崎田委員、曾根委員、田川委員、鍋島委員、西野委員、萩原委員

（欠席：阪田委員、中本委員、本谷委員）

２　オブザーバー　３名全員出席

新出オブザーバー、中野オブザーバー、冨中オブザーバー

３　事務局（市）

市民局文化スポーツ部長、スポーツ振興課長、

教育委員会学校教育部指導第一課文化・スポーツ教育担当課長

Ⅳ　会議次第

１　開会

２　議事

(1)　計画策定の背景（社会環境の変化とスポーツの意義）について

(2)　広島市のスポーツ振興における主要課題等について（各委員からの発表）

(3)　スポーツ振興計画の基本理念について

３　閉会

Ⅴ　公開・非公開の別

公開

Ⅵ　傍聴者

１名

Ⅶ　会議資料

広島市スポーツ振興審議会第３回スポーツ振興計画検討部会　次第
広島市スポーツ振興審議会スポーツ振興計画検討部会委員等名簿
広島市スポーツ振興審議会の開催スケジュール（予定）
議事の(1)関係
　計画策定の背景（社会環境の変化とスポーツの意義）について
議事の(2)関係
　ア　広島市のスポーツ振興における主要課題等について
　イ　広島市のスポーツ振興における主要課題等について（要旨）
議事の(3)関係
　新しい「スポーツ王国広島」の概念図（案）
【参考資料】
(1)　国、広島県、政令指定都市のスポーツ振興に関する計画の計画期間等
(2)　スポーツに関する意識調査結果の比較（対全国調査）
(3)　スポーツに関する意識調査結果の分析結果について
(4)　広島市体育指導委員の定数等に関する事項
(5)　財団法人日本体育協会公認のスポーツ指導者の人数及びその活動内容について

Ⅷ　会議の要旨

１　開会
２　報告事項
（前回第２回部会の委員からの要請のあった５件の質問事項について参考資料に基づき事務局から説明）
３　議事（「Ⅸ　発言の要旨」参照）
(1)　計画策定の背景（社会環境の変化とスポーツの意義）について
（説明内容について、意見等なし）
(2)　広島市のスポーツ振興における主要課題等について（各委員からの発表）
（各委員からの発表後、意見交換）
(3)　スポーツ振興計画の基本理念について
（説明内容について意見交換）
４　閉会

Ⅸ　発言の要旨

【報告事項】

【事務局（スポーツ振興課長）】
＜審議会の開催スケジュールの変更について説明＞
＜参考資料の説明＞
(1)　国、広島県、政令指定都市のスポーツ振興に関する計画の計画期間等
(2)　スポーツに関する意識調査結果の比較（対全国調査）
(3)　スポーツに関する意識調査結果の分析結果について
(4)　広島市体育指導委員の定数等に関する事項
(5)　財団法人日本体育協会公認のスポーツ指導者の人数及びその活動内容について

【議事の(1)：計画策定の背景（社会環境の変化とスポーツの意義）について】

〔東川部会長〕

議事の(1)「計画策定の背景（社会環境の変化とスポーツの意義）について」説明する。

＜東川部会長　配付資料を説明＞

計画を策定していく上で全体的に押さえておかなければならないものがある。近年の社会状況などの大きな変化の中で、スポーツはどういった役割を果たし、また、スポーツを実施することでどういう効果が期待されるのかということはどの計画書にも冒頭で出てくる。このことは、広島市としてスポーツをどのように捉えるかということに関わってくる。こうしたことから「計画策定の背景について」を最初の議題として挙げさせてもらっている。

資料は議事の（１）関係であるが、正直まだ詳しくそれぞれの文言をまとめる段階までには至っていない。原案を作ったのは私であるが、何かたたき台がないと前に進まないので作らせてもらった。これまでの国のスポーツ振興基本計画、あるいは各自治体が出している計画、さらには笹川財団の白書など、近年の社会状況で抑えておかなければならないものを箇条書きにした。

計画策定の背景は、形としてどうしても入れなければならないと思うし、まとめ方もいろいろある。項目立てをしてそれぞれについて説明をしていく中でスポーツがどのような役割を果たすべきか、あるいは期待できるかということを書いていく方法もあれば、社会環境の変化をまとめて書いて、それを踏まえた上で、スポーツの意義、あるいは効果をいくつか項目を立てて書くといった大きく二つの方法がある。どちらがいいと決めているわけではないので、このことについても意見を聞かせてほしい。

今日は、案の１の「計画策定の背景」では７項目挙げているので、私からそれぞれの項目の簡単なイメージを説明させてもらった後に意見をいただきたい。

まず、一つ目の「少子化の進行」や二つ目の「超高齢社会の進展」については、これまで多く言われているので、皆さんもお分かりだろうと思う。後ほどまた委員の皆さんから出されている提案につながっていくことになるが、少子・高齢化社会の中で、子どもとお年寄り等をどうつないでいくのか。つないでいく手段としてスポーツに期待されていることはよく述べられている。「健康」や人と人との「コミュニケーション」、「ふれあい」、「つながり」という面では、高齢化、少子化社会においては、スポーツの意義が見直されている。

三つ目の「経済活動の低成長化」は、現実問題として経済的に苦しい状況にあるのは事実である。スポーツをしたくてもできない、あるいは予想以上に自由時間が多くなっている現状がある。こういう状況は長く続いてほしくはないが、こういう現状も抑えておく必要がある。

四つ目の「共生社会の中のスポーツ」については、一つ目や二つ目ともオーバーラップするような内容だろうと思う。例えば、クラブや学区体協のことも話題に挙がってくると思うが、様々な人に開かれたスポーツのシステムをどう作っていくのかということが共生社会の「共生」というところのイメージになると思う。

次に「環境問題の深刻化」であるが、広島市も JOC とパートナー都市協定を提携して、「スポーツと環境」という問題に積極的に取り組み始めている。そういうことが、もっと前面に出せるような計画にする。環境という部分については、これまでの他都市の振興計画を見た中では全体的に少し弱い気がする。そういう意味では今回の委員の皆さんもその辺を踏まえ、ただ環境を守るということだけではなく、環境問題に対してスポーツは何ができるかということは、大きな問題だと思う。

六つ目は、「国際化の進展」であるが、ご存知のとおり広島市は「国際平和文化都市」であり、欠かせない問題であると思う。

最後は、「ライフスタイルの多様化」であるが、共生という部分とも関わってくる。一言で言うと「価値観が多様化されてきた」とみられてしまう訳であるが、その多様化の状況も一つ一つ違うのかもしれない。多様化する価値観の中で、みんなが笑顔で過ごせる、それが築けるような社会にするために貢献していけるのがスポーツであるというイメージで７項目挙げてみた。特にこれにこだわるわけではないが、委員の皆さんからお答えいただいている今回のミニアンケートの内容も、多分にこういうことも念頭において書いていただいていると思う。これからはこうなる、これからの社会はこういうことが大切であるということで、今後こんな取り組みをすればいいのではないかという提案をしていただいていると思う。私の方からも議事（１）に関してまとめさせていただいているが、案の１の方法でまとめるのか、案の２の方法でまとめるのかは部会長預かりとさせていただくとして、このようなことをまとめていく中で、皆さんの意見を組み込み、具体的な計画策定の背景になるようにしたいと思っている。

【議事の(2)：広島市のスポーツ振興における主要課題等について（各委員からの発表)】

〔東川部会長〕

それでは、具体的な皆さんからの「広島市のスポーツ振興における主要課題等について」の提案に入らせてもらいたい。

提案の方法であるが、こちらで４本柱を作らせてもらったので、もしかするとこれに入らない、そぐわないところもあろうかと思う。

「地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興」、「競技力の向上」、「まちの活力創出に向けたスポーツの振興」、「学校における体育の充実」の４本柱に基づいて、１つの柱ごとに委員の皆さんから発表していただきたい。

次回の部会ではこれらを集約した形のものを主要課題ということでみなさんに提案したい。

＜議事（２）関係　ア・イ参照＞

＜各委員からの提案＞

【地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興】

〔小野副部会長〕

地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興の中で、体育指導委員の活動の活性化についてであるが、現在、体育指導委員は、学区体育協会や広島市スポーツ協会の地域スポーツ振興担当コーディネーターと連携しながら活動しており、一年間を通してかなりの行事を実施している。区民スポーツ大会や広島市スポーツ・レクリエーションフェスティバルなど、５月、１０月は１か月間毎日、体育指導委員の活動として外に出ることが多い。その間の各学区体協の行事もすべて体育指導委員が携わっているので、年間を通してかなりの活動をしている。月に一度スポーツ振興課に活動報告を提出しているが、その内容は１か月間毎日活動をしているといった記述である。私たちは、できる限りお手伝いしようということで、要請があればすべて出向くようにしている。

新しいスポーツ振興計画において、もっと具体的な役割分担を示していただければ、まだまだ体育指導委員も活動できるのではないかと思っている。現在、各学区に３９０名の体育指導

委員がいるが、区民スポーツ大会や、スポーツ・レクリエーションフェスティバルに体育指導委員がすべて関わっているということを市民に知られていないのが現実だろうと思う。毎年５月に実施している区民スポーツ大会に向けて、２月から４・５回、実行委員会を開いている。当日は、開会式や式典もすべて体育指導委員が行っているし、スポーツ・レクリエーションフェスティバルも各区から３０～４０名以上の体育指導委員が関わっている。

〔東川部会長〕

体育指導委員さんは、一生懸命やっているがみんなから認めてもらえていないという悩みというか課題であろう。

〔小野副部会長〕

区民スポーツ大会にしても、スポーツ・レクリエーションフェスティバルにしても全てに関わっているにもかかわらず分かってもらえていないのではないかなと思う。

〔東川部会長〕

次に、今日は欠席であるが、阪田委員からは区スポーツセンター単位でのスポーツギネスづくりや何かに挑戦していけるようなイベントの開催など、アイデアもいただいている。

また、広島からの発信につながるような企画、それをインターネットで紹介し、いろいろなところに発信することで、地域でのスポーツ振興につなげていくというものである。

〔曽根委員〕

基本的なコンセプトをどこに持っていくかを考えた時に私は「スポーツでつなぐ」という概念を考えている。実は、現在私は安芸高田市のスポーツ振興計画にも携わっている。安芸高田市は「スポーツでつなげるライフステージ」というのがキーワードであり、私はやはりスポーツでどうつなぐかということがこれからの大きな課題になると思う。基本的なコンセプトは「スポーツでつなぐ」ということである。これからのスポーツ振興を考えていく上では意識調査結果を考慮しなければならないと思う。そこで、この意識調査のどこの部分を意識して作っていかなければならないかということであるが、（１）から（５）に書いてあるようなことをポイントにして作っていかなければならないと思う。それがどのようにスポーツでつながっていくのかを考えて作ってみた。

私の取組内容は、非常に具体的な文言になっている。指導者ということでは、確かに体育指導委員さんなど多くの指導者がいるが、私はやはり一般の人を巻き込むということで言えば、資格を持った人だけではなく、資格にとらわれない指導者を増やすことも大事だと思う。教えることは学ぶことと言われるが、指導者として人に教える、子ども達や高齢者に教えるなど指導するということがスポーツへの興味関心につながっていくだろうということで「地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興」の中に含めている。例えばポイントとなる「市民とスポーツ指導者をつなぐ：一人一レク一指導」と書いてあるが、他都市でも「一人一スポーツ」というのがあったがここでは「一指導」が入っている。

もう一つは、今までに無いものとスポーツをつなぐ、それをミックスすることによって新しいスポーツの姿というか、新しいスポーツを作り出していく。例えば環境問題をどのようにコミットするかということでは、スポーツ・プロデューサーが関わらなければならないと思う。スポーツ関係者からではなく、一般の人からの公募もしてほしいと思う。それと「学校における体育の充実」で言えば、校庭の芝生化の推進も環境問題にアプローチする一つの方法ではないかと思う。スポーツはスポーツだけを考えれば良いという時代ではないということで、そのことを念頭につくってみた。

〔田川委員〕

どのようなイメージが、地域におけるスポーツ・レクリエーション活動が振興されているとみるのか、そのイメージや目標が明確でないと議論が難しいと思う。

そのような中で、特に我々指定管理を受けている立場から言うと、またいろいろな市民の皆さんの声からすると、あるいはいろいろなアンケート結果からみても、「スポーツ・レクリエーション施設の設備」について非常に要求度が高いという気がする。逆に利用者はかなりの人数がいるが、実際にスポーツセンターを見ると、例えば今日などは朝から１００人以上の人が、大体育室の３分の１を使って卓球をしている。普通の日でもそれだけの方々が利用している。一方プールを見ると、泳ぐというよりも歩いている人がほとんどである。そうすると苦情が多くて、「歩くにはプールが深すぎる」、「赤いフロアーがある浅いところは子どもがたくさんいて邪魔になる」など、中には喧嘩になることもあり、そこにいた監視員が怒られる。このような状況からすると新たなスポーツ施設を再整備する必要があると思う。

バレーボールがあって、バスケットボールがあって、サッカーがあって、２５メートルのプールがあってという感覚ではなく、歩けるプール、楽しめる施設、トレーニング室でも筋力トレーニングだけでなく、ウォーキングとか軽いトレーニングができるような用具を設置するなど、少し考え方を変えていかなくてはならないと思うが、お金がかかることなので一応の目標としたい。それから、当然のようにハード面だけではなく、指導相談体制も考える必要がある。現在、メタボリックとか転倒防止とか介護予防など、広島市の委託を受けながらいろいろな形で取り組んでいるわけであるが、そういった面での気軽に相談できる体制というものをもっと強化していかなければならないと思っている。そういった意味でも今後コーディネーターは重要な役割を果していくだろうということを強調すべきだと思う。

３点目は、スポーツセンターそのものが、単なるスポーツを行う場だけではなく、様々な情報の発信をしていかなくてはならないと思う。今でもトップス広島の活動風景のパネルや子どもたちの絵を展示するなど、いろいろ取り組んでいるが、もう少しスポーツに関するさまざまな情報を手軽に入手しやすい環境も作っていく必要があると思う。さらに、広島市スポーツ協会との連携強化ということで、現在市民の元気やまちの賑わいづくりやアクティブな高齢者を育成するということで取り組んでおり、そういった意味では今後さらにスポーツ協会との連携を強化していく必要があると思うし、それが地域のスポーツ振興に役立つのではないかと思っている。

〔東川部会長〕

昭和５０年過ぎくらいからスポーツセンターの設置計画が始まったが、その当時のスポーツセンターに求められる役割もあったと思う。その後の社会の変化の中で、新たな役割というものも増えたのではないかと思う。委員の皆さんからハードのことについての提案というものはあまり多くなかったが、予算というものは別問題として、やはり大きな問題であると思う。

取組内容２の指導・相談体制の充実のところは、例えば保健センターなどとの関わりもあるのか。

〔田川委員〕

実際には、各区の健康長寿課とも連携している。運動処方や健康に関する相談というのはそれなりの資格を持った職員がいるのでそれらを生かして行っている。非常に大事な事業であると思う。

〔鍋島委員〕

先ほど部会長からもあったが、少子高齢化や市街地が崩壊しているといったことで、その課題やコミュニケーションの低下というものが気になっていて、今回の振興計画は来年のことを

どうするのかという本当に大切なことだとは思う。私は少し飛んで、５年か１０年先にどういう形のスポーツでまちづくりをしていくかというビジョン的な出し方をしているため、少し分かりにくいかもしれない。

まず、総合型地域スポーツクラブで、自治体とか地域とかスポーツの各団体がスポーツ振興計画の目玉として発表されている。「地域スポーツの施設の概念に関する体育館、学校、公民館、広場という考え方を超え」という意味は、今までそこをスポーツセンターの拠点として考えていた総合型地域スポーツクラブというのも大切なわけではあるが、自分は、その頭に「広島型」という言葉を加えさせてもらった。この「広島型」というのは、正に多世代の人が、多種目を同時に提供するようなスポーツクラブを作っていくということである。ここで欠けているのが高齢者で、高齢者の元気な人が健康づくりのためにいろいろな施策に生かされている。今朝のテレビでも公園でバランス棒やストレッチアームというものを元気な高齢者が指導していたが、私はこういった人達はスポーツクラブに入るのは難しいと思うので、今の高齢者施設を活用させてもらって総合型地域スポーツクラブができないかと思っている。実施にあたっては、そこの施設に入っている人はもちろん、地域の高齢者の人を巻き込んで多種多様な世代の人が一緒にできると良いと思う。特に、要介護の人や要支援の人でもリハビリや健康を取り戻すためにスポーツをやりたいという人も多いと思うので、そういう人も巻き込めるようなスポーツクラブを広島から発信できるようなクラブにならないかと思う。

今までは個の時代だったからスポーツをするのも一人をどうするのかという形であったが、これからはみんなでどうスポーツをしていくのかという視点での取組をするためには、総合型地域スポーツクラブをしっかり根付かせる必要があると思う。

〔東川部会長〕

総合型地域スポーツクラブという名前を使うかどうかは別として、この問題は計画の中では欠かせない問題であると思う。曽根委員に伺いたいが、今の福祉施設を核にしたクラブはあるか。

〔曽根委員〕

福祉施設というのはアイデアとしては面白いと思う。

〔萩原委員〕

福祉施設はあるにはあるが数が少なく、学区によってすごくアンバランスである。いい施設があるところはあるが、学校施設しかない地域もある。したがって、総合型地域スポーツクラブの考え方も変わってくる。

〔西野委員〕

もともとリハビリのために行われていた障害者スポーツの始まりが、今では障害のある人も含めて多くの人がスポーツを楽しめる時代になってきたと思う。長い歴史の中でリハビリスポーツから始まっていることから、現在では障害者のスポーツが障害者のものだけではなくなってきているのではないかと思う。そこで例えば、身障者センターでは４０歳代から８０歳近くの人が毎日シッティングビーチボールバレーを１日２時間近く楽しんでいる。何人かの出入りがあるが、長年続けている人もおり、皆さんかなり上手になっていて、障害のある人もない人も介助者も一緒になってスポーツをしている。

そこのグループが主催になって大会をしようということで、地域の学校など多岐にわたって参加者を募集している。小学生などには、障害があってもなくても一緒にできることを学んでもらっているのではないかと思う。

大事なことは、地域の人を巻き込んだ人と人とのつながりと、スポーツを通じて広がりがで

きていることだと思う。同好会を通じて、障害のある人もない人も一緒になって活動できるスポーツ活動が今後増えたらいいと思う。それと障害者スポーツが障害者のものだけではないという情報を発信していかなければならない。それがコミュニケーションの手段になって地域でも活動ができるようになっていくと思う。例えば今まで身障者センターでグラウンド・ゴルフをしていた人が、地域の小学校や公園で地域の人と一緒にするようになってきていることなどが一例である。

〔萩原委員〕

広島市学区体育団体連合会では、まず学区体育協会の活性化が一番であると考えている。現在我々の連合会では、活性化に向けた検討委員会を立ち上げて取り組んでいこうとしている。まだかなり時間がかかると思うが、新しいスポーツ振興計画の中で具体的な役割分担を示し、組織の活性化を図りたい。地域におけるスポーツの振興のためには、学区体育協会が元になるので、そこが活性化することが大切であると考えている。

学区体育協会では、軽スポーツが非常に盛んである。今ではバレーボール、ソフトボール、ゲートボールは人が集まらないが、グラウンド・ゴルフやバドミントン、ソフトバレーボールなどの軽スポーツ、特にボールの柔らかいものを使って行うスポーツが人気がある。それと、少子高齢化ということで、高齢者の人が熱心にスポーツをしている。若い人は仕事の関係でなかなかついて来ないという難点がある。我々も現在検討委員会を立ち上げて活性化に向けて何とか頑張っているところである。

また、体育指導委員や我々も加盟している㈶広島市スポーツ協会の地域スポーツ振興担当コーディネーターと連携してスポーツを通じた地域の活性化に努めているところである。

それと、今後は、スポーツ振興に関係する団体が連携・協働し、効率よく事業を展開する必要があると考えている。本連合会も新しいスポーツ振興計画に出てくる各団体の役割を明確に示すとともに連携の必要性について明記することにより、関係団体の活性化とともに効率の良い事業が展開できるのではないかと思っている。

特に、総合型地域スポーツクラブの位置づけについてであるが、「学区体育協会が総合型地域スポーツクラブに移行していくのか」、あるいは「学区体育協会の内部に総合型地域スポーツクラブの役割を担う部を作るのか」、それとも「別の組織として総合型地域スポーツクラブを立ち上げるのか。また、それを誰が作るのか」ということも今後我々の課題ではないかと考えている。特に、施設を含め、様々な問題があり、総合型地域スポーツクラブは広島市全体に広げるのは難しいのではいかと思う。

〔東川部会長〕

これは難しい問題で、今萩原委員が言われたように学区体育協会が活性化しなければならないということは十分に認識しているということなので、それを具体的にどうするのかということについては、思い切ったことも考えなければならないのかもしれない。その中で総合型とどのような形で接点を見つけていくのかであるが、ここは思い切って打ち出せないかなと思うし、反発があるだろうことは重々承知している。いずれにしても学区体育団体連合会が活性化しなければならないということは皆さん認識されている。

〔曽根委員〕

思い切って今回のスポーツ振興計画の中に盛り込むことによって変わる可能性もあると思う。いずれにしてもそれは議論をしないといけない問題であると思う。

〔東川部会長〕

我々の振興計画が先走るということではないが、学区体育団体連合会の方も検討を重ねてい

るということであるので、そういう意味ではお互い知恵を出し合って何かいい方向が出せればと思っている。

〔鍋島委員〕

１０年先を見た時に果たして学区単位でものごとをする社会にあるのかなという気がする。もちろん少子化で学校がどういう形で統合していくのかという問題や中心市街地から子どもがどんどん周辺部に移動しドーナツ化現象を起していることや、広島でも少し離れているところでは広域でものごとをやっていかなければならないといった状況がでている。そういった意味では、これから学区がどのようになっていくのかは分からないが、総合型地域スポーツクラブも今後はそれぞれの特徴のあるクラブを作りながら、新しいつながりを作っていかなければならないと思う。また、中学校が自由選択になってくると、学区というのはこれから機能しなくなってくる。子ども会の役員もなり手がいなくなってくることを考えると、今後は学区でものごとをやっていると活動が沈滞化していくと思う。そういう面では１０年先の将来、どのような形になるのか分からない。

〔中野オブザーバー〕

確かに地域コミュニティーが崩れているという言い方をされてきているが、子供達はほとんど地域の活動に参加しないのでよく分からない。今学校でいろいろなアンケートをとると一番低いのが「地域の行事に参加をしましたか」という項目である。ほとんど地域活動に参加していない。これはいろいろな状況があるようであるが、子ども会などの地域諸団体はエリア的に範囲を制約されていることもあったり、小学校で終わりとする考えもあったりするようである。親も連帯意識が薄いため、中学校で地域と連携して何かしようとしてもネックになっているのはそこにある。さらにそこに学区自由選択性の問題も重なってくる。また、部活動関係では交通の問題や指導者の問題でいろいろとトラブルもある。やはり大人のチームワークやコミュニケーションをどのようにとっていくかというところから入っていかないと難しいのではないか。

〔新出オブザーバー〕

地域を考えた時に、問題はその地域に住んでいる人が遠く離れたところにまで行ってスポーツ活動や行事に参加するのかどうかである。まず難しいであろう。先ほどアンケートを見ていたが、市民が地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興の中で、一番困っていることや解決してほしいことをみると、「使いやすい施設や場所」というのが一番多い。ということは、遠くにある施設が使いやすいかどうかである。やはり身近にある施設を利用するのが当然だと思う。特に高齢者になればなおさらである。そこで身近な施設として使えると言えば学校、あるいは区スポーツセンター等だと思う。したがって中身はいろいろあると思うが、やはり施設の整備や点検が重要だろうと思う。

もう一つ言うと、アンケートの中で二番目に書いてあるのが運動・スポーツをする時の費用についてである。これも大きな問題だと思うが、公共施設の有料化などから、運営費用の負担増がある。それと同時に公益法人においてはそれを負担しているため会費や参加費としての個人負担も増えている。受益者負担の原則を皆さんに理解してもらっているわけであるが、負担が増えれば増えるほど誰もがスポーツ活動というわけにはいかなくなる。特に子どもにとっては、子どもが出すお金は親が出す。そういう状況があるので非常に切実な問題になるわけである。何かいい方法がないかと思っている。身近な施設でかつ無料で使えると一番いいが、そうでなかったらできるだけ気楽に使える施設になるといい。

〔東川部会長〕

学区体育協会の活性化というところから出た問題であるが、全国的に名をはせているのが学区体育協会で、広島の大きな目玉として育ってきたものである。鍋島委員が言うように学区にとらわれるとそれに縛られてばかりでそこから離れてしまうのではないかということもあるし、オープンにしてしまったら、コミュニケーションなど地域の人とのつながりを大切にしなければならないのではないかという一方で、みんな好きなところに行ってしまって地域がなくなってしまうという問題も出てくる。なかなか解決できないところはあるが、今まで出たことを考えながらどう「つなぐ」かというところだと思う。

それと、本谷委員が今日欠席であるため本谷委員の提案を紹介したい。

本谷委員からは、地域スポーツ団体への活動支援や子どもが積極的にスポーツに親しむことができる環境づくりという提案をしてもらっているが、次回本人から詳しく説明してもらいたいと思う。

〔新出オブザーバー〕

指導者の派遣についてであるが、それぞれの地域で指導していただいたり、活動の楽しさを教えていただいたりするのはなかなか大変であると思う。派遣といってもいろいろな手続きが必要であるので、できるだけ簡略化した方がスムーズにできると思う。

〔中野オブザーバー〕

アンケートが来て非常に困ったことが、学校では地域のスポーツに関する意見などを校内で話す場がないため、地域で何が行われているかという理解が薄い。このためすごく閉鎖的になっている部分もあり大変困ったので、先生方からご意見を聞きながら勉強したい。

学校では何ができるかというと、人と人とのつながりしかないようなところもある。実は五日市中学校では、新体力テスト、いわゆるスポーツテストをした時に、地域の体育指導委員に来ていただいた。これは一つの刺激になりよい結果がでればということで実施したが、緊張しすぎて結果はあまりよくなかった。ただ生徒には地域に体育指導委員という人がいることを知らせることができたので一つの成果であったと思う。今後も連携していきたいと思っている。

【競技力の向上】

〔小野副部会長〕

競技力の向上の取組に関しては、体育指導委員と各種スポーツ団体との連携による専門指導者の派遣等である。

体育指導委員は、住民に対し、スポーツの実技の指導やその他スポーツに関する指導・助言を行うことにより市のスポーツ振興を図っていくこととなっている。これまでニュースポーツ等の研修などを実施している。スポーツを習って帰って各区で伝達し、区から学区に持ち帰ってスポーツ教室を実施するなど、競技者を増やすということに力を入れている。競技力の向上というのは、体育指導委員が直接関わることは難しいが、スポーツを紹介することはできる。

〔東川部会長〕

競技力向上というところから体育指導委員を考えたらどうなのかなと思う。今まで全く思ったことがないことであるが何かの活性化になるかもしれない。

次に、阪田委員からは、プロの経験者を増やす、あるいはそういう人を生かす、広島市ではDoスポーツで小学生を対象に事業を行っているが、底辺を拡大するということにつながるのではないかと思う。

それともっと競技についての情報発信を行い、多くの人に関心をもってもらうことが大切ではないかという内容である。

〔崎田委員〕

すべての子どもにスポーツができる環境を与えてほしい。

〔曽根委員〕

児童生徒のレベルの底上げは非常に重要だと思う。またベンチマークにもつながってくると思う。

取組内容１であるが、これはプロスポーツなどはよくやっていることである。競技の枠を超えて他の分野の人に教えてもらう。陸上競技の選手に走り方を教えてもらう。例えば中学・高校で相撲部だった生徒が陸上部に入ったり、サッカー部のトップレベルの子が陸上部に入ったりする。反対に陸上部だった生徒がトライアスロンにいったりする。そういうことが大学あたりでは起こってくるわけである。他の分野を知って自分の競技を見つめ直す。実際、競技の枠を超えた交流を一部で実施されたところの話しを聞くと非常に効果があって交流もできてきたようである。これは非常におもしろい試みになってくるのではないかと思う。これも競技力の向上につながってくると思う。

〔田川委員〕

まず、競技力向上に向けた新たな育成・強化プログラムの作成についてであるが、現在広島県体育協会が取り組んでいる新たなジュニアの育成に関わって見ると、広島県はスーパージュニアとしていろいろな競技の人が指導して、単一的な競技だけでなくて、様々な競技を経験しながら取り組んでいる。残念ながら広島市の場合はそういう状況にない。競技団体への補助や合宿・遠征の補助など補助金がらみの施策だと思う。それがいけないというわけではないが、そこはもう少しさらに突っ込んだ少年期から成年期までの強化プログラムを作り直す必要がある。それはどこが作るかは別として、そういう必要性はあると思う。本当に育成強化をするのであれば、指導者の育成はもちろんのこと、少年期からの体力づくりや競技力・技術力の向上を含めた新たなプログラムを作っていく必要があると思う。

それと、取組内容２として指導者の養成・確保ということである。沼田高校の体育コースや皆実高校の体育学科があり、様々なところで活躍しているが、残念ながらその活躍した生徒が広島に戻って指導者になっているのか、あるいは教員になって活躍しているのかというと、そのデータを私は見たことがない。本当は、沼田高校の体育コースを作った時も将来彼らが指導者になれるようなカリキュラムを組んで育てていくことが狙いだったと思うが、残念ながら当初から関西や関東の方にもっていかれており、やっと今は少し留まりつつある感じがする。やはり育てた生徒が、学生あるいは社会人となって広島に戻ってこれるような、また企業としてもそれを支えていくような大きな仕組みがないと競技力向上といっても難しいと思う。これまで何十年も競技力向上といってきているわけなので、この際新たなプログラムと新たな仕組みを考えていく必要があると思う。

３点目は、やはり広島市スポーツ協会との連携として、現在ジュニア選手の育成・強化、優秀な指導者の養成、スポーツ医科学の活用、それと「夢・感動、スポーツプラン」ということで、トップスポーツ選手との交流なども行っているわけであるが、そういうことも強化していく必要があると思う。

〔鍋島委員〕

田川委員が言ったようなことが魅力的な地域スポーツクラブでできないかなと思う。それが特にジュニア層の育成に、言うなれば英才教育につながっていけばいいと思う。広島には優れた素質を持った子ども達がたくさんいるわけであるが、やはりそういった年齢層に合わせた生きた指導というのは大切であるし、そういうことを乗り越えることによって世界的なレベルの

人材が輩出できるのではないかと思っている。

スポーツアカデミーというのがあるが、あのような形で石川遼選手や浅田真央選手や卓球の愛ちゃんとかがどういう形で育っているのかということを知る必要がある。どうも私のような昭和世代は、「しごき」まではしないが、指導の中には規律訓練的な指導をどんどんレベル化してやっていたわけである。やはりそういったことも大切だとは思うし、素質を伸ばしてやる指導というのが大切だと思う。実は私はサンフレッチェジュニアの指導のお手伝いをさせてもらっている。何をしているかというと、２泊３日のキャンプをサンフレッチェのジュニアの選手を対象行うわけである。毎日サッカーばかりしている人間に違うスキルで「チームワークとは何か」とか、「イニシアティブゲームなどをしながら相手とスムーズにいくにはどういうことが必要なのか」という気付きの学習をする。そうすることによって、選手が次のステップで格段に伸びていくらしい。そういう英才教育というのは、今までの教育の仕組みを少し変えなくてはいけない。それは昭和世代に合うような英才教育というもののような気がする。

〔西野委員〕

まずは、スポーツを子どもたちに早い段階で経験をしてもらい、そこからどんどん枝葉が広がっていく状況になればいいと思う。現在子どもの体力づくりなどが言われている。自分自身も車に乗る機会が増えて何でもないところでつまずいたりしてしまうこともあるが、いろいろなスポーツをやっていく時にはやはり動き作りから始めることが大切であると思う。

〔萩原委員〕

学区体協としては、これまで競技力の向上に携わったことはないが、底辺拡大ということでは協力できるのではないかということについて検討していきたい。

〔東川部会長〕

本谷委員からは、指導者の資質を高める取組、指導者養成ということの提案が出されている。理由としては、競技力を高めるということと、最近不祥事が多いのでそういう面での指導者の資質を高めていく。ただ勝てばいいということだけではない。これを取組としてどう入れていくかを検討していく必要がある。

〔新出オブザーバー〕

競技力の向上というと、すぐに強化委員会という形のものをイメージしがちであるが、競技力向上と広がりというものは別な物ではないと思う。強化にせよ普及にせよ指導者が必要である。小学生体育連盟においても指導者の確保・育成に関しては大変苦労している。背景としては、社会情勢を始めとするいろいろな理由がある。一番は学校体育から社会体育へという大きな流れに加えて、学力低下、子供の数の減少、教員の採用が非常に少ないということが挙げられる。中学校であれば、教科は１０以上あるのに対して、採用は全県で３０名程度である。それぞれの教科は３人くらいしか採用しないわけである。とても後継ぎの養成まではいかないわけである。これは小学校も同じことであるが、教員であれば誰でもスポーツ活動が好きで、指導に前向きであるかというとそういうことはない。若い指導者が極めて少ないということである。このことを克服するためには若い力を導入するしかないと思う。この問題については、行政も考えていかない限りここ１０年で状況はさらに悪くなる。なぜそのようなことを言うかというと、自分が学校に勤め始めた頃は自己裁量の時間もあり、教職員のスポーツ大会も随分盛んであった。バレーボールだけでも１００チーム程度、卓球で約３００チーム、バスケットボールは約１００チームの参加があり、経験者も未経験者もみんな楽しみにしていた。今はその３分の１も参加しない。それだけ教職員のスポーツ活動の経験者が少ないということである。小・中・高とも教職員のチームというのがあって、現在かろうじて残っているチームもあるよ

うであるが、休部になっているクラブがかなりある。平均年齢四十何歳となるとそれはしんどい部分もある。そういった意味では、ここ最近寂しいものがあると感じている。いい解決方法があればと思う。

〔東川部会長〕

一言で指導者の養成というと簡単に終わってしまうが、具体的にどうするかとなると先ほどの沼田高校などの話ももしかしたら関係するのではないかと思う。

〔中野オブザーバー〕

スポーツをやらされる子どもではなくて、もっと子どもの方から寄ってくるスポーツへと取り組む必要があると思う。今は学校もそんなに厳しい指導をするということもないので、自発的な活動にもっていくためには指導者の資質の問題がでてくる。具体的には、いろいろな種目を子どもに体験させてやりたいということと、意欲をもっていろいろなことをやらせてやりたいということである。それと一番怖いのが燃え尽き症候群である。一時すごく話題になった時期に、やはり指導者が勝負だけにこだわるので、小学校であれだけやって、中学校で燃え尽きてしまう。中学校でやって高校で燃え尽きてしまって何もしなくなる。過去にそういうことがあったが、最近はそういった意味でも「子どもが積極的に取り組んでいけるようなスポーツを何とかしようじゃないか」という話しが随分出てきている。何とかそこにもっていきたいと思うが、強化というのはお金がかかることである。指導者も必要であるが、できるだけ幅広くスポーツができる環境ができるといい。また、学校は特に時間がないので、部活動の時間でも夏は１時間半くらい確保するのがやっとで、冬場は３０分くらいしかしないという学校はかなりある。その中で子どものスポーツ活動を保障することは難しくなっている。

〔冨中オブザーバー〕

競技力向上に関してと、学校における体育の充実については、非常に厳しい状況である。体育の単位数も新学習指導要領ではさらに減っている。その中で、やはり新学習指導要領における規制がある。例えば武道は何単位とか、この運動は何単位などという規制である。自分の学校でいうと、卒業する生徒の約半数は就職するという現状から、体育の教員と話し合って、新学習指導要領にはずれない範囲で生涯スポーツをするようにしている。

例えばバレーボールであると、皮の硬いボールではなくてソフトバレーボール、女子ではソフトボールを授業で行っている。なぜなら、ソフトバレーボールとソフトボールは地域でよく行われているので、就職後、地域で活動できるように事前に経験させておこうということである。あるいはラインの引き方、ラインテープの張り方、これは新学習指導要領にはないが、粉がどのようにしたら目に入らないかとか、どのようにしたら直角が取れるのかというように地域で直ぐに活躍できるような内容を取り入れている。

【まちの活力創出に向けたスポーツの振興】

〔小野副部会長〕

体育指導委員は、トップス広島やトップスポーツチームと交流するイベントのコーディネートをする機会はほとんどない。ただ、学区（地元）での特色を生かした、各チームの応援機運を盛り上げていくような働きかけはできると思う。もう少しトップス広島やトップスポーツチームの情報提供を体育指導委員にしていけばもう少し盛り上げていけるのではないかと思う。やはり上手な人の試合を見れば会って見たいという気になる。

〔崎田委員〕

スポーツ博物館で企画展ができたらと思っている。例えば東京ドームにある野球体育博物館

のようなものが西日本にあればいいと思う。

その理由はいくつかあるが、スポーツを「する、みる、ささえる」だけではなく、「スポーツを学ぶ」ということがあるといいと思う。個人的ではあるが、自分はよく大学生と交流することが多いが、彼らは大学に入って急にスポーツを勉強したり、研究したりしなければならないという状況になって、やはりスポーツは勉強するものなのかという感じになっているように思う。そういう学生は減ってほしいと思うし、そのためには、小さい頃からスポーツはするだけではなくて、学ぶ機会があればいいなと思う。３番目に書いてあるのは、以前「広島スポーツ１００年展」という資料を読んだことがあり、その編集後記には比治山にスポーツ博物館ができるのではないかということが書いてあった。今回の計画でそれが実現できればいいなと思っている。

取組内容の二つ目は、環境保護の観点に立ったスポーツ競技大会の徹底ということである。スポーツをすること自体はそもそも環境に負荷をかけているという視点に立ってスポーツをしてほしいと思う。競技団体別に環境への取組があれば分かりやすいと思う。

〔鍋島委員〕

現在少子高齢化や中心市街地が崩壊してまちに元気がなくなっている。これは経済の影響もあると思うし、まちでそれを支える人間の自立性や主体性、積極性が低下していると思う。それを解決するのは、スポーツしかないのではないかと思っている。元気な市民の元気なまちづくりをするには、スポーツ文化を振興させる必要があると思う。取組内容１として「生涯スポーツ社会を実現していきたい」ということである。資料にはトップスポーツからフィジカル・レクリエーションまでと書いているが、レクリエーションは幅が広く、「楽しい身体活動」を「フィジカル・レクリエーション」と言っている。トップスポーツである競技スポーツからフィジカル・レクリエーションまでバランスのある展開ということが必要であると思う。そうすることによって、高齢者の寿命を延ばすとか、医療費が少なくなって社会保障費を削減できるなどといったいい面もたくさんあると思う。

２点目であるが、現在開催している「ひろしま国際平和マラソン」を世界のいろいろな国から参加してもらえるような大会にして、観光だけでなく、平和の交流の場にできないかと思っている。そうすることにより、参加者に平和のシンボルである平和公園の慰霊碑に参拝してもらうこともできる。市民の熱意で１００メートル道路を世界の人との交流の場にできればと思っている。

３点目は、スポーツ界のコミュニティービジネスということで、地域に幸せをつくっていく文化というのが言われている。例えばスポーツをしようと思えばスポーツジムがあるが、これはビジネスでやっているわけである。一方で学校や体育指導委員が実施していることは、「０円」の世界である。これからは、物事をするにはお金がかかるという社会が必要であると思う。やはり自分が選んでいいコーチやいい指導者をつけられるような環境を作っていく必要があると思う。このようなことをコミュニティービジネスと呼んでいる。コミュニティービジネスというのは、自分が金儲けのためにビジネスをするのではなく、自分の目標、例えばスポーツを振興する社会を作っていきたいという目的があったら、目的を達成するためには収益率が低くてもそういう取組をやるということである。コミュニティービジネスやソーシャルビジネスということが、これからの社会を作っていくのではないかと思う。そういう面では、スポーツの目的を明確にしながらコミュニティーやソーシャルというビジネス的な視点をもって進めていく必要があると思う。今後はできるだけそういったものをサポートする環境を作っておかなければならないと思う。

〔曽根委員〕

まちの活力創出に向けたスポーツの振興として３つ上げているが、特に２番目の市民とスポーツの場をつなぐということは非常に重要であると思う。以前オリンピックの誘致というものも出ていたが、ビッグイベントの計画を立てるとしたら自分はやはり合宿の誘致というものが大事だと思う。例えば子ども達に合宿中の練習風景を見せるといった「百聞は一見にしかず」である。大会は見るにしても距離的に遠いが、合宿は距離が近いという気分になる。例えば平和大通りでストリートイベントをしてもいいと思う。また、まちの活力創出で言えば旧市民球場で何かやってもいいと思う。都心の中でいろいろなスポーツのルートを作り出す。やはりいろいろなスポーツを都心ですることも大事だと思う。自分が書いた具体的なものは、まちの活力創出に向けたスポーツ振興を縦軸にし、レクリエーション活動の振興と競技力向上のすべてを横軸にしたら横と縦のすべてが相互に関係してくる。スポーツ振興は相互に関係しているということで、例えば市民とスポーツの場をつなぐということで言えば、トップスポーツの合宿誘致やイベントの創出と競技力向上の取組をつなぎ、学校における体育の充実の取組にスポーツ観戦がつながっていく。そういった意味では取組内容２というのは、まちの活力創出で言えば非常に重要になってくると思う。

〔田川委員〕

まちの活力という意味合いというものをある程度具体的に整理しないと、いろいろな捉え方があると思う。

まず、様々なスポーツボランティア活動の活性化や活動支援をもっとしていかなければならないと思う。例えば、カープのボランティアで言うと、これまでスポーツ協会の職員が現地に行ってすべての準備をし、役割分担までしてからボランティアにお願いしますという形であった。このため、毎回試合のたびに職員が出て行かなければならないという状態があった。そうでなくて、スポーツ協会はカープに対し「今回はこういう方が何人います」といったボランティアの情報を提供するだけで、実際はカープの方でボランティアの世話をする。そうすることでボランティアが主体的に活動していくようになる。これまでスポーツ協会があまりにも手を出し過ぎてボランティアとして自立させていなかった。ところが今は主体的にボランティアが活動している。今後はボランティア活動を支援していくような取組がいるのかなと思う。それから、様々な地域での応援体制を作ることができればいいと思う。

〔西野委員〕

広島市内の会場を使って障害者スポーツの大会を開催している。全国障害者スポーツ大会の観戦の案内やこうした大会を応援してくれる人がいるといいと思う。選手も応援してくれる声を聞けば大会も盛り上がるし、選手本人も励みになると思う。それ以外に、国際大会も開催されている。例えば車椅子テニス大会も開催されていて、有名な国枝選手も広島に来たことがある。そういう大会を子ども達が見に来て、それをきっかけに車椅子テニスを始めた子どもがたくさんいる。そういう大会が開催されていることをまずは知ってもらい、そのことによりスポーツが盛んになればいいと思う。また、障害者スポーツ指導員が、そういったスポーツ大会の開催時に、ボランティアで手伝いに来てくれる。指導員無しではとても運営ができない。こうしたスポーツ指導員が増えていって地域の体育指導委員やスポーツセンターのコーディネーターなど各部門でスポーツに携わっている人と連携をとりながら障害者スポーツも盛んになっていくといいと思う。

〔萩原委員〕

トップスポーツチームの応援気運の醸成を図る事業展開については学区体育協会が、広島市

ひと・まちネットワークと連携して独自に展開している。また広島市スポーツ協会の地域スポーツ振興担当コーディネーターと連携して、より地域と密着した取組の拡充を図れると考えている。

〔東川部会長〕

本谷委員からは「プロスポーツ、企業スポーツの振興」ということで、多くの幅広い方々の参加ができるようなイベントについても見直しをしてほしいとのことである。

〔中野オブザーバー〕

トップスポーツ選手は、子どもの関心が高いことから、もっといいものを見せてあげるなどいい環境を与えてやればいいと思う。今回広島ガスのバドミントン部が本校に来てくれたが、やはり素晴らしい技術などを見ることで刺激になっている。選手に会って握手するだけでも何かのきっかけになる。本校にも為末選手のような素晴らしい卒業生がいるので、コイン通りでストリートイベントでもやってもらえるようにお願いしたいと思っている。それを見たら刺激になって小学生でもちょっと陸上をやってみようかというようになるのではないかと思う。

〔東川部会長〕

今の皆さんの意見をまとめると、やはり見るという視点において、どのような仕掛けを作っていくかということであると思う。

【学校における体育の充実】

〔小野副部会長〕

体育指導委員は、学校の体育施設を使用させてもらっている。学校の先生方も体育指導委員の認知度が低くて、学校から積極的に連携して何かしてほしいということは全体的に少ないが、今日中野先生の話しを聞いてほっとしている。東区では体育指導委員が体育の授業に行き、子ども達にニュースポーツを指導しているようである。私たちも留守家庭の方からドッジビーを教えてほしいとか、カローリングを教えてほしいなどの要請があるが、そういった要請があれば何とか無理をしてでもお手伝いに行くようにはしている。こちらの方から「行きましょうか」と言っていいものなのか。

〔中野オブザーバー〕

いいと思う。なかなか接点がないので是非声をかけてほしい。

〔小野副部会長〕

今回もある学区の留守家庭の方から要請が来ていて現在日程を調整しているが、要請があれば行きたいと思っている。

〔東川部会長〕

同じような意見が阪田委員からも出ていて、「スポーツボランティアの導入」ということで、体育の指導に大学生をということに取り組まれている。それに加えて一般の方の派遣なども取り組んでいくことでもっと充実していけばいいという意見である。

〔曽根委員〕

一つ訂正してほしい部分があり、学校における体育の充実の取組内容２の「ポイント制スポーツ観戦」を「まちの活力創出に向けたスポーツの振興」の取組内容３に入れてほしい。

取組内容２の「校庭の芝生化の推進」というのは非常に重要であると思っている。環境問題の側面からも子どもの健康ということからも重要であると思う。第五次の総合計画の中にもこのことが入っているので、これは是非入れてほしい。

例えばこの間夏休みに私が住んでいる小学校の校庭で遊んでいる子ども達を見たが、砂埃の

中で遊んでいてとてもかわいそうに思った。もちろん校庭によっては場所や地形的な問題で植えるのが困難なところもあるとは思うが、この辺は最近非常に研究がなされているので、一部だけでもいいので是非校庭の芝生化を進めてほしい。

〔東川部会長〕

私の立場から言えば、取組内容１の体育教師の積極的採用を切にお願いしたい。中野委員や新出委員からもあったが、広島で育ったアスリートの中には広島に教員で帰って来れないと思っている人が多い。教員になれないから広島に帰ってこない。最近は教員の採用も少し持ち直してきているので、是非広島に帰ってきて恩返しがしたいと思っている若者たちをどうするのかということも長いスパンの中で見た時にすごく重要だと思う。

〔曽根委員〕

偏見があるかもしれないが、体育教師の積極的な採用というのは、いろいろ事情があるとは思うが非常に重要だと思う。学校の元気は体育教師が作っていくということで、体育教師の積極的な採用を是非お願いしたい。

〔田川委員〕

学校体育の振興ということになれば、教科体育やクラブ活動などいろいろあると思うが、競技力向上の視点から言えば、何のために沼田高校に体育科コースをつくり、何のために体育学科ができているのかを考えた時に、そこにはやはり良き指導者として広島に体育教師、あるいは良きアドバイザーとしてフィードバックしてくれると期待してのことである。そうでなければ投資しても意味がなかったわけであるが、そういった意味では良き指導者として学校体育の指導者として戻ってきてくれるというサイクルを広島は作るんだということも思い切ってやる時期に来たかなと思う。このことが指導者の若返りにつながっていくと思う。特に小学校の体育については、学校での体育を好きになるような子どもの育成は大切なことだろうと思う。

〔東川部会長〕

鍋島委員からは、スポーツとの出会いというものを大切にする。そういうことを学校教育の中で大事にする。今の学校体育の流れの中ではその方向にはきているが、それをさらに充実していくということである。

〔西野委員〕

学校の特別支援学級での活動に位置づくと思うが、小・中学校や子どもセンターの放課後支援ということで指導に行かせてもらっている。進行性のある小学生の身体障害児の子どもが、学校の大休憩、昼休憩で野球やドッジボールをしている時に、ずっと外で見ていたということがあり、何とかその中に子ども達が入っていける機会を作れないかと考えた。工夫次第で一緒にできることを子ども達に伝え、今ではみんなでやっている。学校では障害がある子とない子がいるが、学校においてどのような工夫をすれば全員が一緒にスポーツをすることができるのかをみんなで考え、子ども達にスポーツを作らせることができないかと思っている。例えばバスケットボールをするのであれば車椅子に乗れば一緒にできることや視覚障害者であればみんなアイマスクをすればできるということである。何を工夫すれば一緒にできるのかということを子ども達が考えていける機会があればいいなと思う。実際卓球バレーや風船バレーは、そういうところから生まれたスポーツである。いろいろな発想をもっている子どもも多いと思うので、何かスポーツを作ろうという機会があればいいと思う。

〔東川部会長〕

私の大学の実践であるが、障害をもった車椅子の大学生と車椅子バスケットをやったが、やる前とやった後では障害者に対する、あるいは障害というものに対する意識が大幅に変わった

ということがあった。今、西野委員が言ったように、やはりお互いがお互いのことを体験するということは非常に重要であると思う。それを心身障害者福祉センターに行かないと体験できないという現状があるが、どうやって広がっていくのかなどが重要であると思う。

〔萩原委員〕

学区体育協会は、現在１３６学区の小学校区があり、学校におけるスポーツのバックアップに取り組んでいきたいと思っているが、実際３～４年前から学校に指導に入っている。例えば学校は指導者が足りないということで、２か月に１回程度、バドミントン、グラウンド・ゴルフ、ソフトテニスなどのスポーツの指導や竹とんぼづくりの指導もしている。これは我々がお願いしたものではなく、学校の方から依頼があったものである。

〔新出オブザーバー〕

学校の現状を言えばやることはたくさんある。体育の６領域の中でどれだけのことをしなければならないか。バスケットボールだけを１か月も２か月もできない。せいぜい数時間である。陸上も全部やっていかなければならない。これが学習指導要領である。現在、５・６年生が年間９０時間、１年生が１０２時間、２～４生年が１０５時間である。この間の学習指導要領の改訂で皆さんが小学生の時よりもかなり減っている。３分の２以下になっている。しかし内容項目は減っていないし新しい項目も入っている。先般ラグビー系が入るということで広島県ラグビー協会の方にもお願いしながら、ビッグアーチでタグラグビーの教職員向けの指導者講習会を２００名程度集めて実施するなどの新しいことにも挑戦している。ただ、何しろ５・６年生は年間９０時間の中でいろいろな題材に取り組まなければならない。与えられた条件の中で教職員は最大限の努力はしていると思うが、客観的にみても９０時間では十分だとは言えないと思う。新しい指導要領の中身を見ると、子どもの体力の低下、運動をする子しない子という運動習慣の二極化傾向にあるということから体つくり運動という指導内容が低学年から設定されているわけである。改めて言うまでもないが、個人個人が適度に遊んでいたら体力の向上につながるではないかというニュアンスで捉えられていたものを、組織立ててやらせようというところまできている。学校は体育の授業で選手を育てようとは思ってはいない。健康や体力の向上への意識付けを行い、体を動かすことの楽しさを味あわせ、生涯スポーツに結びつくようにと思い、子ども達に接している。

〔中野オブザーバー〕

生涯スポーツの基礎という観点で、教科の取組も含めて実践している。また、健康意識を高めることなど少しレベルの高い学習もするが、なかなか生活の場面にまで生きていないと感じている。

また、目先を変えていかなければならないということで、いろいろな交流もしていかなければならないと思っている。先ほどのニュースポーツの指導など地域の人の協力もあるので、是非そういうことを学校にも取り入れていけるシステムを作っていきたい。ただ、学習指導要領の枠の中でいろいろと規制があるのでなかなか難しいが、そこまでしていかないとスポーツを好きになり自主的にスポーツに関わっていこうという生徒を作っていくことは難しいと思う。

〔東川部会長〕

ひと通り発表してもらったが、今後１０年なら１０年というスパンでいくのか、５年なら５年でいくのか、あるいは計画を作った何年か後には見直しをするのか、そういったことも踏まえて次の計画も考えなければならないと思う。計画策定の基本的なところは次回以降にしたい。

〔萩原委員〕

我々の小学校にメイプルレッズが月に４回くらい来て指導してもらった。最初は人数が少な

かったが、今はかなり増えている。

〔東川部会長〕

今日の提案の中にあったように広島にこれだけのトップアスリートがいるのにこのままにしないでもっと身近なものにしていければと思う。

ここで、私の方からの相談であるが、委員の皆さんに４本柱でそれぞれについて取り組む内容、あるいはその根拠や課題を検証してもらったが、ここに挙がっているのは第５次総合計画の中にうたわれている柱である。そのもっと細かいレベルまで第５次総合計画では出されているわけである。例えば吉島体育館の立て替えというのがあるが、こんなに細かい内容まで入っており、このことを議論したのでは現場の声が届かない計画になってしまうだろうということで、その一つ上の４本柱のところで意見をいただいたわけである。

これからの進め方として、この４本柱で施策の体系を考えていくことになってくると思う。個人的にはどうすればいいのかいろいろな資料を見ているが、例えば学校における体育の充実ということで言うと、青少年の体力の向上などいろいろな項目に関わっていくと思う。独立させた方がいいものもある。今は独立して入っているが、今皆さんの意見を伺っている限りにおいては、これも一つの独立した形の中で出せるもの、逆に中に入れてしまうことで、見えるものも見えなくなってしまうものもあるのかなという思いもした。先ほど新出先生からあったように基本は教科体育の充実というのは誰しも認めるところであると思う。学校体育というのか、学校スポーツという言い方の方がいいのかもしれないが、そういうものを充実させていく。それは決して学校だけを充実するだけではなく、そういうところにもしっかり取り組むことで、地域も生き生きしていくと思う。

次の準備のこともあるが、当面この４本柱でまとめていくことでいいか。それとも少し考えた方がいいのか意見がほしい。

〔新出オブザーバー〕

学校における体育の充実のことであるが、ジュニアのスポーツというジャンルが学校体育なのか社会体育なのか分からない。問題が少し混線しそうな気がする。

〔東川部会長〕

体力向上というのが大前提であって、それが体育になったということだと思う。確か元々は総合計画では「学校教育の充実」の中の小項目として「体育の充実」というのが出ていたと思う。

〔曽根委員〕

例えば、体育とスポーツの概念をどのように分けるかということだと思う。体育・スポーツ活動の充実の中の学校における体育の充実となると体育の授業になる。体育・スポーツにするとクラブ活動も入れるかどうかに関わってくる。私は柱をつくる時に、大きな内容から小さな具体的な内容にもっていく際、具体的に何をやりたいのかというところから積み上げていかなければならないと思う。したがってそれに合わせたような柱を作っていかなければならないと思う。総花的でいいものができたが、何も残っていないようになるよりも、何がやりたくてどういう事業をすることによって広島は変わるのかというところから柱をもっていく方法もあるのではないかと思う。

〔東川部会長〕

今回、委員の皆さんに出していただいたものというのは曽根委員が言われるところである。少なくとも振興計画の内容を考える上で何かきっかけがあった方がいいだろうなということで４本柱にしたわけである。まず、大きく柱を立てておいて中身の問題はむしろその次ではな

いかと思う。例えば競技力向上の向上と言った時にその次に何をするのかというのが当然出てきて、そのシンボルとなるような項目を見て、「広島はこういうことをやろうとしているのか」というものがそこに見えてこなければならないと思う。今回のやり方はある程度の大枠を最初に決めておいてもう一方で下からどんどん皆さんの生の声をいただきそれをまとめていく。決して上の方にまとめていくつもりはない。

〔曽根委員〕

大まかには、市民スポーツがあって、競技力向上があって、ジュニアのスポーツがあるので大きな柱としてはこの４つになるのかなと思う。

〔東川部会長〕

こういう柱が出てくるまでには、「ポン」と出てきたわけではなく、しっかり検討されてきているわけであるから、大枠のところだけを決めておかないといけないと思う。何人かの委員の意見を聞いて基本的にはこれで進めるとして、最後の学校における体育の充実というところをもっと分かりやすく体育の授業だけでなく、学校の中でやる体育活動、あるいはスポーツ活動、子ども達が体を動かすすべてのことを網羅することで充実させる。そこはタイトルを工夫させてもらうということで、こういう方向で次の部会の時に今日の話を整理したものを提案したいと思う。

次に議事の３として、この間本谷委員から「新しいスポーツ王国広島」の概念図を計画書の中に盛り込んだ方がいいのではないかという宿題をもらった。その時は皆さん何となく言葉のイメージは共有できたと思うが、具体的に概念図にしたらどのような形になるのだろうかということで事務局と話し合い作ってみた。この概念図がイメージとしていいかどうかということはある。

従来のスポーツ王国広島というイメージでいうと、競技力の向上というカラーが強いものであったかもしれない。また他の柱との関わりやつながりも薄いものであったかもしれない。それらを田川委員からいただいたアドバイスをイメージして四角推にしたもので、それぞれが合わさった部分のつなぎ目をどういうふうに埋めていくのか。お互いがそこにどう手を差しのべていくのか。それぞれの三角の中をどう進めていくのかも施策の一つであるし、それぞれの三角のつなぎ目をどう強固なものにしていくのかということも施策の一つである。そういったイメージで今回概念図を作ってみたが、概念図にするのはなかなか難しいものである。概念図というのは単純でなければならない。複雑になるということはイメージがつかめていないということである。

もう一方で、これまでのスポーツ王国広島のイメージは競技スポーツの一つの三角形で平面であった。ではこれまで地域スポーツなどはやっていなかったのかというとそうではない。やってきてはいたが、スポーツ王国広島のイメージの中には入り込めていなかったのではないかと思う。そういった意味で言うと、競技スポーツの三角はしっかりあるが、他の三角は色が薄い。しかもそれぞれがあまり「のりしろ」をもとうとしなかったというようなイメージがある。

〔曽根委員〕

この間の話ではイメージの共有のようなものはできていたと思う。まったくこの通りだと思う。私はもう一つのイメージがついていて、この三角といった時、競技力向上でいうと下から積み上げてきて一番上の方がトップアスリートになるが、では地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興となるとどれが土台になって上に上がっていくのか、まちの活力創出に向けたスポーツの振興はどうなのかとなると説明しづらくなるのではないか。では四角推ではなくて円錐ではだめなのかとなってしまう。

〔東川部会長〕

曽根委員の言うとおりで、私は四辺で捉えるとすれば長方体になるのかなと思う。上に先細っていくのではなくて、上に上がっても充実している。立体的に捉えると必ず上は何を意味するのかという話になる。競技力の向上になると上はトップになる。地域スポーツであると上は何になるのかとなってその辺がなかなか難しい。立方体で捉えるのも一つであるが、平面的に捉えるのも一つである。

〔曽根委員〕

この図は三角になっているが、これをコップに例えると、四つの活動が充実してくれば、「コップから笑顔があふれるんだ」という感じになるが、これでは少し違和感があるように思う。

〔東川部会長〕

１時間話してようやく分かるのではなくて、初めて見た人が「なるほどな」と分かるようにしないといけない。

いずれにしても、これは宿題とさせてもらいたい。ある意味この概念図は今回の計画のシンボルになると思うので、スポーツをしていない人でも分かるようなものにできないかなと思う。

〔田川委員〕

今までの競技力向上というのは、底辺から少しずつトップアスリートへという方が分かりやすい。地域スポーツにおいてもそういうものが考えられないかと思う。どういうことかと言うと、どういう目標値をもって、我々は地域におけるスポーツ・レクリエーション活動を１０年間でやり遂げるのかという視点は必要ないのかなと思う。例えば、国体で言えば、広島県選手団の中で広島市の選手の割合を５０％にするんだという目標値であればわかる。では地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興となるとどういうものを目標として我々は進めるのかと言った時に、目標も無くただ地域におけるスポーツ・レクリエーション活動の振興というあらゆるものを「ごった煮」のようにしてやる計画を立てるのか。いや１０年間なのだからここに絞ってある程度の目標値を決めてそれに向かっていくんだという考え方でいくのか。そこが分かるようにするのが必要だと思う。したがって、例えば地域のスポーツ・レクリエーション活動で地域住民が地域においてスポーツ活動を週１回のところを週３回運動する人を５０％にしようじゃないかという目標にすると、それを高みの頂点にしてそれに向けてどのような取組を行い底辺から５０％にしていくのかという計画が必要なのか、それは無理なのか、その辺を決めないといけないと思う。

それとお互いが相互に支え合うということが大切である。競技力向上と地域スポーツ・レクリエーション活動は別々のものではなく、折り重なってお互いが支え合っているイメージが必要だと思う。

〔東川部会長〕

今、田川委員が言われたイメージで作っているのは間違いない。

それと田川委員が言われた目標値はどうするのかということについては、これからの課題であるが、私個人としてはそういうものは出しておかないといけないと思う。最初に政令指定都市が出している計画を一覧表で見てもらったが、やはり総花で終わったのではこれからの計画に馴染まないように思う。

〔田川委員〕

ようするに地域スポーツ・レクリエーション活動の振興という非常に漠然とした言葉ではなく、もう少し具体的にこういうことを呼びかけていこうという設定をしないと総花的になってしまうのかなという意味である。具体的にこれが目玉であるというものが必要ではないかと思

う。

〔曽根委員〕

他の振興計画を見るとだいたい似たり寄ったりである。どんなに知恵を絞ってもだいたいこんな柱になってくる。もしみんなに注目してもらおうと思ったら言葉を考えないといけないと思う。これに変わる言葉は何があるのかと考えると非常に難しい。例えば「競技力の向上」に変わる言葉をどうするのかである。

〔東川部会長〕

柱の次の項目で何かポイントになるのかだと思う。これだけあちこちに出てきて違ったものを出すのも難しい。そこのところは委員の皆さんの斬新なアイデアをいただければと思う。

〔曽根委員〕

「スポーツが好き、広島が好き、笑顔が好き」というキャッチコピーの部分は考えなくていいのか。

こう並べるのであれば、「スポーツが好き、笑顔が好き、広島が好き」ではないかと思う。それともう一つ、笑顔が嫌いな人はいないから、笑顔を取って、「スポーツが好き、広島が好き」というのはどうか。

〔東川部会長〕

前回の部会で「笑顔」という言葉が話題になったので「笑顔」を入れているのだと思う。スポーツを好きになれば笑顔になるということであるが、一応これはたたき台である。もう少しみんなから笑顔が出るような会議になるように頑張りたい。

【閉会】

〔東川部会長〕

今後は、事前に事務局と相談しながら今日のまとめや具体的な計画の次の段階を整理して、次の部会で検討していただきたいと思う。